

くろみち・対談3

千利休 古田織部 上田宗箇と
四百年以上にわたってつづく
茶の世界。

時代に合わなければ

静かにしていれば良い。

呼吸と同じように時代に合わせて

外に出す。内にためる。

それが継続する力だと思う。

衰退は終わりを意味する経済と違って

何百年、何千年でも続くのが文化。

そこが文化や宗教の強いところだと

上田宗箇流十六代家元、上田宗岡氏。

「宮島てらこや」の取り組みにも

深い理解を頂き、

会長にも就任していただいた氏に

日常の中の文化や心のありようを

お聞きしました。

亭主：吉田 正裕

宮島弥山 大本山 大聖院 座主

第三回 客人：上田 宗岡

プロフィール)

1945年生まれ。広島市出身。

慶応義塾大学経済学部卒業。

972年上田宗箇流家元若宗匠継承。

1995年第16代上田宗箇流家元継承。

(社)青少年育成県民会議会長

広島県私立中学・高等学校教育後援会会長

(財)広島市文科財団理事。

著書に「上田宗箇流 茶の湯」(共著・第一学習社)

「上田宗箇の茶」(講談社)等がある。

大人が説明しなくても 子供は鋭い感受性で感じている。

はじめがないから我慢できない。

訓練しないから

感情もコントロールできない。

吉田 今年やっと「宮島てらこや」を立ち上げることができました。

お家元には会長を引き受けていただきありがとうございます。

上田 気軽に引き受けてしまったのですが、良かったのでしょうか。

吉田 みんな喜んでおります。

いろいろなさっておられる教育関係の活動の中で、お家元は教育をどのように感じておられますか。

上田 教育そのものより、その前が問題だと思います。子どもに限らず、公私のはじめがなくなり過ぎていてはないのでしょうか。はじめがないから我慢できない。訓練していかないから感情もコントロールできない。その繰り返しのような気がしますね。

吉田 共働きが増えて、子どもと接する機会も少なくなっています。それも影響しているのではないのでしょうか。

上田 ご両親の目が家庭の外に向くことが多いと、子どもが置き去りになりますよね。特に、小中学生くらいまでは母親の存在がとても大きいと思いますよ。

吉田 男女同権でも、母親と父親の役割分担が必要と言う事ですね。

上田 そう。今の生き方は、日本人が本来持っているものと合わないのかもしれないね。

吉田 そういった中で「宮島てらこや」では、その欠けている部分、「日本の文化」「本物の体験」など、日本の良さみたいなものを、子どもたちと一緒に体験したいと思っているのですが。

上田 広島県の芸術文化課の事業で、私どものところへ、小学生がお茶の体験に来られるのですが、先生たちがびっくりするくらい子どもたちは静かにしている。大人が説明しなくても「ここはそういう場だ」と子どもは鋭い感受性で感じているのでしょうか。

吉田 DNA解析の世界的権威でいらっしゃる村上和雄先生は、環境によつて遺伝子のスイッチがオン、オフされるとおっしゃっています。

お茶を体験しているときにように、良い環境では、自然と良いスイッチが入るのでしょうかね。

上田 そういう機会を増やしていくことこそが大事だと思います。

吉田 いろいろなところで、そんな良い機会をつくっておられますが、子供たちだけでなく、最近、武家茶道への女性の関心も高まっていますとお聞きしています。

上田 上田宗箇流は、空間も手前も直線的な流れが多くキリツとした緊張感があります。戦後から最近まで、あまりあわなないものだったようですが、近頃そういうものを求める方が増えていらっしゃる事は、日本の良さが薄れてきている事の裏返しかもしれません。

少し話がそれるかも知れませんが、時代の空気と合う、合わないと申しましょか。呼吸と同じように、時代と合っているときは空気を外に吐き出す。逆に、時代と合わないときは静かにしていたほうが良いですね。息を内に溜めるように。

先代は、内にじっと溜め、明確に門を閉じていました。

戦後の三十〜四十年を中途半端に開いていたらどうなっていたか解りません。「時代に合わない」と思ったら門を閉ざす事ができるのは、宗教や文化の強さですね。

経済では、衰退は終わりを意味してしまいますから、そうはいきませんものね。

吉田 もしかしたら、そこにこそ何百年も守り伝えてきた秘訣があるのかもしれないね。

上田 以前、「衰退が継続の力」だと言った事があるのですが、門を閉じているときがあるから継続できるのだと思います。

吉田 力を入れるときは呼吸を止めるように、それが強さにつながっているのでしょうかね。

上田 そこを見極めていかなくはいけない。その時代その時代ではなく、長い目で、うちの文化伝統を理解していただければ良いのですから。

日常の中で五感を刺激する。

それを自分で意識する。

それが文化でもあると思います。

吉田 そのように、永い年月をかけて伝えられてきた日本の良い文化を日々の生活のなかに活かすにはどのようなすれば良いでしょうか。

上田 お茶は知識もいるのですが、深めるためには体術が重要です。

私は毎朝、庭に出て花を摘んで、お茶室の掃除をして、花の前

上田 お経を唱えた後にお手前の稽古をします。そうしますと、花が

すつと入ってきて「花が生きているな」と思ったり、お茶をたてたときの湯気（ゆき）の香りが鼻から入ってきます。

お茶を頂く事で、「生きている」という実感が毎日あります。

例えば、皆さんも、朝ちよつと花を生けてみる。寝る前に香を焚いてみる。電気をつけず自然の光を感じてみるなど、日常の中でどれだけ五感を刺激することができるか、それを自分で意識してみただけでも良いのです。

また、自然と接する機会を作る事も良いと思います。自然と接し、それをいかに意識するのか。それが日本の文化でもあると思いますよ。

吉田 一昨年、二十一日ほど弥山に寝泊りをしたのですが、自然の中でお護摩を焚いていると、なんともいえない気持ちになるんです。こんなに贅沢な時間を頂いていいのだろうかというような気持ちですね。

上田 五感がフル回転したんでしょうね。

吉田 五感で感じるようなゆったりした時間を過ごす場がなくなっていますね。

上田 やはり人間にはちよつとしたゆとりが必要ですね。

お茶をいただく、しみじみとするんですよ。それで、生きていると実感する。そうすると、謙虚になれるんですよ。

吉田 今は目に見えるものを大切にしますけれど、本当は目に見えないものこそ大切にしないといけない。

私は、お家元がお茶をたてられるときの、炉の中にお湯を戻される音と、炭のはぜる音がすごく好きですね。

上田 湯気もぱーっと上がりますよね。湯気も生きているからね。

吉田 そういう時間と空間を持てるというのが、本当の豊かさなのではないかな。

上田 日本人は大事なものを捨ててきてしまったかもしれませんが、おそらく気がついて、必ず元に戻ると信じています。

吉田 最後に、今私たちができる第一歩としてはどんな事がありますでしょうか。

上田 一番大事なのは、住んでいるところを愛すという事だと思っています。そのためには、まず知らなければいけない。地域について勉強しなくてはいけないですね。

そして、自信と、地域を引っ張るリーダーシップを持つ事をそれぞれひとり一人が意識して行動する事ではないでしょうか。

吉田 心して、行動を起こします。本日はお忙しい中、貴重なお話を有難うございました。